

来なかつたため、国家権力より見放され、次第に朝鮮漁民の反撃を受け、敗退脱落して行く一連の過程であると定義出来る。それに對していわゆる自由發展時代とは、通漁時代以来漁民層に寄生し、莫大な中間利潤を吸収して資本を蓄積した鮮魚運搬業者、及び魚問屋より成る寄生商業資本、ならびに漁民層の分解によつて生じた一部富漁層が、大型動力漁船を建造して資本主義漁業への道を歩み、

ついには大洋漁業（林兼）、日本水産のような漁業独占資本を成長せしめた時代と理解されるから、第一次大戦を境として二つの時代に区分する方が、技術史的にも、更に広い観点からしても妥当ではないかと考えられる。

以上のような問題点はあるにしても、前人未踏の分野を開拓され、極めて豊富な実証的資料を蒐集整理された功績はいささかも減じるものではない。或は資料中に聴取調査に基づくものが多いため、その史料の価値に疑をいだく人があるかも知れないが、元來漁業関係には文献史料が極めて少い上に、最近百年にも足らぬ時代の出来事であるから、聴取による資料も同時代史料に近い史料の価値を有

する筈である。ただ史料の処理においていささか羅列的に過ぎ、内面的連関性に乏しいうらみはあるが、それだけに忠実に資料が採録されていると云えよう。なお附録として収められている「朝鮮主要移住漁村年表」及び「各府県水産試験場の鮮海漁業開發試験一覽」等も極めて貴重な資料を提供していることを附言しておきたい。

以上思いつくままに言葉を連ねたため或は著者の真意を誤解し、著者に対して礼を失した点もあつたのではないかと思われる。ここに改めて深く御わび申し上げると共に、日本漁業史の一環としての鮮海漁業史が、この著作の出現を契機として新たな展開の時期に達したことを確信し、その将来に大きな期待をかけるに至つたことを申しそえておきたい。（朝水会昭和二十九年五月刊 四九六頁 英文レジュメ一四頁）

——河野通博——

西岡虎之助著

日本文学  
における 生活史の研究

文学作品をその時代の社会生活とともに正しく理解するということは、文学研究者にとつても歴史家にとつても、文学史を研究する場合の中心問題の一つである。本書はこの問題を、著者が、歴史家として、日本古典文学と日本史への限らない愛情をこめて、追究された諸労作を収めたものである。

表題からもうかがえるように、文学作品を通じて時代の生活のみ、またそれによつて生活が文学を生みだしてゆく事情を探究するのが本書の方法であるが、これは著者が永年とつてこられた態度であり、さきとその業績の一部は『民衆生活史研究』（昭和三年・福村書局）としてまとめられてわれわれにも親しいものになつてゐる。こんどまとめられたのは、左のように、著者がここ二三十年來逐次發表されたものに新たな二三篇を加えた十三の論文と短篇十五とであり、古代から近代までのあらゆる時代にわたる。

① 歴史における貴族的要素と民衆的要素  
(一九四八)

② 貴族社会の生成と崩壊 (一九五二)

③ 万葉集時代の社会経済 (一九五三)

- ④ 日記文学作者の境遇（一九四一）
  - ⑤ 物語風史学の展開（一九三八）
  - ⑥ 大鏡の著作年代とその著者（一九二七）
  - ⑦ 平家物語の史実と創作（一九五三）
  - ⑧ 中世紀行文学仙躰鈔（一九二六）
  - ⑨ 中世説話文学における村落生活（一九五二）
  - ⑩ 没落階級からみた戦国社会の展開（一九五三）
  - ⑪ 近世田舎人の文学的感覚（一九三七）
  - ⑫ 近世大庄屋福富大次夫の生活（一九五三）
  - ⑬ 歌謡からみた近世の農村経済（一九四七）
  - ⑭ 国文学その折りおり（随想・短篇など十五）
- 各論文は、ほとんどがすでに知られているものなので、一つ一つの内容紹介はここではさしひかえたいと思う。それで以下、全体としての本書の特色と、私のつたない感想とを記すなかで、内容にもふれてゆきたい。
- 本書を読んで誰しもが感ずることの第一は、著者の、民衆の生活に対する深い愛情であろう。これはさききの『民衆生活史研究』においても示された著者の一貫した信念にもとづくのであるが、このたびもまず巻頭において古代、封建、近代各時代の文学作品のなかから典型的な「貴族的要素と民衆的要素」を

とり出し、「その本質上の差異は民衆生活における生産的な勤労性と、貴族生活における消費的な遊戯性とに帰着させ得るであろう」とする。そこには、過去のいづれの時代にも「支配階級としての貴族と、被支配階級としての民衆とが常に蔽存していた」という「階級社会」に対する、あるいは貴族、富者に対するはげしい憎しみを含んでいるのであるが（以上第①論文）、しかし著者はただ単純な抽象的な「社会の矛盾」を強調されるのではない。総じて著者は、一部の読者にはおそらく物足りなく思われるほど、理論や搾取や権力について「分析」をされない。むしろ著者の真面目は、その民衆への愛情を、文学作品の一字一句に生活を味いとする態度で示されるところにあるといえよう。著者はつとめて原文の味を生かそうとして、一見片々たる語句さえも丹念に引用される。ために、引用がかなり煩雑で冗長な嫌いがあり、些か読みづらな感みがないではないが、しかもそれを敢てされるのは、一語々々の表現の背景となつていく微妙で複雑な社会関係を、抽象的な概念に局限して表現するのでなく具体的にそのまま

の形で伝えたいという念願からなのである。民衆への愛情はまた、取材の選択、問題の着眼のなかにもあらわされている。日記文学作者の境遇を説いて「娘を宮仕にださねばならなかつたのは、主として夫なきのちの経済状態のくるしさからであつた」という貴族社会の矛盾をみ、その矛盾を身に負つて宮仕する女性の心情を追究して、王朝文学の土台をみてゆくととき④、そこには貴族を単に支配階級として一括するような粗雑さは微塵もない。大鏡の著者を藤原信能とし、著作年代を万寿二年とするときも、技術的な実証の手続きだけでなく信能と異母兄頼通との複雑な関係が大鏡の文学的性格とともに顧慮されている⑥。後宇多法皇の高野山参詣を叙した「仙躰鈔」を扱う場合⑧も同様である。だが著者のこの態度は、民衆の生活を扱うとき一そう鮮かになつてくる。

中世の村落生活を扱つた⑨の論文では、神仏に支配され狐や狸や鼠にもしてやられる村の生活をその素朴な雰囲気のままに再現する。しかもまた、そうした拘束された生活の根源として封建的専制支配者の惨虐をばつき

り指摘するとともに、それに対する農民の機智と腕力による抵抗をも見落さず結局説話文学から生活の本質的なものを引出すことによつて全体として説話文学の成立基盤を説明することにも成功している。近世大庄屋福富大次郎の生活と題する論文⑩では、馬琴の小説に取材しつつも、それが必ずしも荒唐無稽のつくり話でなかつたことをも明かにするとともに、幕藩体制下の中間層としての富農の遊閑生活と没落の運命を浮彫りにしている。ここで著者は寄生地主制や豪農マニユについては一行の分折も加えていないが、しかし富に対しては機械的な欲望の本質と権力の性格についてははつきり意識しているのである。

さて、このような著者の態度からして、つぎに当然のことながら、作品の文学的価値についての著者のすぐれた着眼に注意される。もとより著者は、あくまでも、歴史家としての「限度」を守つて、正面からは一行の文学論ものべられないのであるが、作品だけの観賞という「観念の世界を、ほんとうの面白さにまで引き上げ」ようとして「歴史」環境、境遇との契合するところ」を追究しようとする

れた(はしがき)結果は、既成の文学史の評価にとらわれない「ほんとうの面白さ」をもつ作品をひろいあげているのである。この態度は、貴族だけしか文字をしらず、著名なものしか伝わっていない古代の作品にさへも、前述のように生活と結びついた「価値」を見出されたことにかがわれるが(④)の日記文学の成立事情、⑥の大鏡著作の動機など)封建時代のもものでは最もはつきりとそれが示される(⑧以下)。読者はここでは、いわゆる中世、近世文学として著名な作品の名はほとんど見出さず、反対に『史料紹介』かと思われほどの『雑書』を知らされるであろう。それは歴史家としての著者の一つの配慮でもあろうが、しかし著者はたんに生活史の資料を紹介しているのではない。「中世説話文学における村落生活」⑨では、『竹叟物語』『あだ物語』『うつつ物語』など説話文学として決して著名でないものを生活史料としてつかうことによつて、反つてそれらに説話の「ほんとうの面白さ」を見出している。あるいはまた戦国時代に「いまの世に、おちちるらく書」を集めて編纂したという『金言和歌集』

によつて、没落階級から産み出される文学の性格を提示している⑩。(だがしかし、著者はあくまで歴史家としての線をこえず、そこにみられる形式性、抒情性あるいは皮肉などについて概念的に説明しようとはしない。)また『凶歳百人一生』と題する近世田舎人の歌集を紹介してそこに町人文学にみられない独特の「生氣」を見出し、その「生氣は……技巧的表現にあるのではなくして、内容が現実の生活を強く反映して田舎・農民の体臭を強く発散させていることに」求むべきだと説き、「田舎、農民文学の強靱性」を「文藝的価値」と別に指摘するあたりは⑩、町人文学だけに終始しがちな近世文学史家への頂門の一針というべきであろう。本書全体にみられる著者のすぐれた着眼の一つは、このような民衆の勤勞性、生産性がうみ出す文学の「面白さ」なのであるが、これは更に「歌謡からみた近世の農村経済」⑪においても端的に示される。この論文では、米の経済から錢・金の経済へと変化するにつれての農民の悲喜交々の生活、しかも「楽しみはどこにもある」としてそのなかから愉しい歌謡をつくり上げ

るのをみ、「ひいてはそれが生産性をおびて」とうけ、「ここでも女性が仕事のはかをゆかす」と指摘するのを忘れない。それはかの「死なぬ様に生きぬ様に」で知られた幕藩体制下の農民生活を、余りに牧歌的にえがいているようにもみえる。しかし著者は、苛酷な取巻を充分知るが故にこそ、勤勞的、生産的民衆のみがもつかの不屈の楽天性を見逃さず、そこに歌謡の「ほんとうの面白さ」を見出すのである。

このようにして本書は、著者が意図された文学と生活との契合点を充分とらえているといえるのであるが、なおここで私なりに二三の問題をつけ加えてみたいと思う。

その第一は、このテーマに対する著者の方法についてである。著者は、生活から文学が生まれる以上文学は生活のなかで理解すべきだ(はしがき)という正当な主張から、その方法として文学作品から生活的叙述部分をひき出すというやり方をされる。そしてそれは多くの場合正当であり、時に極めて成功적でさえある(㉑㉒など)。だがこれが常に必ずしも正しい方法であるかどうかは問題だと思ふ。な

ぜなら、一般的にみて、作品はすでに當時の筆者の主観的所産であるから、その叙述部分を客観的叙述として生かしたりあるいは客観的意義を附与したり出来るのは、ひとえに著者西岡氏の別の学識によるのである。とすればそれはついには「研究方法」ではなく単なる「表現手段」たるにすぎないのであり、事実本書を支えている最も大切なものは、先述のごとく著者の民衆生活への愛情と文学作品へのすぐれた着眼、それに歴史家としての豊富な学識なのである。

もとよりこれだけのことなら、本書の価値を些かも損うものでなく、殊更にあげつらうまでもないことである。けれどもこうしただけ「方法」の結果、大切なことは、著者が、作品を分解して部分を引出すだけで作品全体の文学的性格そのものに表現された生活について全然ふれられていない点にある。たとえば、説話文学をあつかわれながら、説話を生活の糧とした村落の事情については全然ふれることなく㉑、「近世田舎人の文学的感覚」と題されながら「間屋の蔵に打入れれば白鴉シロカラスの米の高直に行当りつつ」というような歌を

作る複雑な生活感情について説明されない㉑。近世大庄屋福富大夫次㉑についても、一般にこのような長者伝説が生まれる基盤の考慮が欠けたために、素材の实在性についての妥当さを馬琴の視角の枠内で紹介したにとどまり、大庄屋の下の農民の感情をほとんど打出すことが出来なかつたようにみえる。しかもこういつた作品の文学的性格については、著者が全くわからなかつたというようなことではむろんなく、先述のように自身充分感じとつておられながらもそういう評価をさけておられるようである。だが、このような評価は決して「文学家の学問領域をおかす」(はしがき)ことではないのである。

さて、こういつた点を克服するためにももう一つつけ加えたい事は、著者の「民衆」と「貴族」というとらえ方に示された没法則的な階級の説明である。私は各時代を通じて「貴族の要素と民衆の要素」をみようとする態度①に問題があるというのではない。そうではなく、いつの場合にも単なる支配者、被支配者という枠でみるなら、同じく支配関係でも各時代により質的に異なる点が見落され、

従つて右にのべた文学的性格——つまり形態・様式・形象など——の時代的特殊性の問題に接近することが出来ないからである。文学的性格の問題は文学の領域に属することかもしれないが、そのためには歴史家が精確な準備をしなければならぬのである。

以上、はなはだ主観的な形で紹介と批判をのべたため、著者および読者に対し、いづれ御迷惑をかけたかと思う。殊に、幾年も前に書かれたものを取り上げて、今日の角度からこれこれこれ勝手な注文をつけたのはたしかに云いすぎであるが、しかし卒直にいつて本書が今日の問題意識からもあまりに生き生きとした内容をもつているので、敢て非礼をかえりみず後学の一人として自己のうけとり方をのべたまでである。この点著者の御寛恕をねがうことにし最後に日本文学の伝統を民衆の生活とともに理解しようとする古典文学研究者と、文学史に接近しようとする歴史家に、特に本書の一読をおすすめして、つたない書評をおえたいとおもう。(本文三九〇頁 図版一六頁、索引三〇頁、定価六八〇円、東大出版会発行)

村瀬興雄著

### ドイツ現代史

「現代史の研究上で私の一番解きにくい問題は、客観的な実証的研究と云うことではなく、それを宿命論に、陥らぬように叙述することです」……これは村瀬教授が、ここに紹介する著書の発刊に当つて、私に寄せられた言葉である。今日ドイツ・ファシズムに対する批判が、漸く多くの研究者の関心に上り、夫々の立場から、論争をも交えて、重要な問題が提出される状態になつた。しかし、すべ

ての現代史研究にとつて共通する困難は、眼前に展開される同時代の諸事件が、余りにも生々しく我々の心に刻みつけられているために、却つて近視眼的な、冷静さを欠く判断に陥りやすいことである。これらの諸現象を如何に整序し解釈し過去の流れの中に統一的に編み込んで行くかということは、歴史学者に要請されている使命であらう。それは歴史的發展全体についての透徹したパースペクティブを持つことによつて可能となることは更めていうまでもないことであらう。我が國の西

洋史学界において、ドイツ革命とワイマール共和制を中心とする研究に、常に先達の位置に立つて來られた教授が、前述の言葉を漏らされたということは、長い研鑽の果に到達された心境を披瀝されたものとして、深い感銘を覚び醒まさずにはおかなかつた。

しかしながら、ドイツ現代史の解明は、現在なお根本的な資料が刊行されつつあるような状態であり、本格的な立論は、実は今から漸く開かれようとしているのであるから、教授のこの著書に、ただ全面的に完成された成果のみを期待することは、却つて教授の真意を誤解することになるのではないかと思う。むしろ我々は、本書の中に、ドイツ現代史に含まれている重要な問題点と、それについての現段階における諸外国の研究水準を汲み取ることに重点を置き、後学の我々がそれを踏み台にしてより多くのものを積み重ねる綱とする心構えで、本書に對することが肝心であるように思う。このような態度で通読するならば、本書は誠に貴重な教示を我々に提供している。殊に欧米学界の動向は、極く最近のものに至るまで、殆んど見落されることなく紹